

編 集 後 記

毎月、事務局から送付される原稿を読ませていただく。ただ読むというだけならば大変勉強になることなのだが、何とか質の高い学会誌にしようと考えながら10編以上を読むと、これは正直なところ大変な作業である。自分で書くこととほとんど同じエネルギーが必要となる。筆者は全編集委員がほとんど同じ気持ちで編集に向かっているのだろうと考えている。

通常ならば、内容が報告に値するか否か、報告する内容が的確に読者に伝わるよう論理的な説明がなされているか、などの点を考慮し、本学会誌にふさわしいと考えれば採用とし、ふさわしくなければ不採用とする。ということでその雑誌の質の高さは編集者の識見と能力の問題である。大変なことである。

学会誌であるということはその内容は学会のレベルの評価にもつながるという大変な責任を持つ一方、もう一つの使命として若い会員の登竜門としての発表の場の確保ということでもあろう。一度でも投稿された方はお気づきであろうが、査読の際の指摘が他誌に比較し、文章のかなり細部にわたる用語にまで及んでいることである。これは本誌の編集の伝統的特徴であるとも思うのだが、本誌が当分の間、邦文による質の高い雑誌を目指すことのほか、本誌の役割を若い方々の登竜門として位置づけていることの現れとも考えている。

英文である利点は内容を世界に発信できることであり、学問に国境はないのが当然であるので、多くの人々に理解して頂くには共通の理解が可能な英文にしくはないとも思うが、国際的にも評価される今日のわが国の消化器外科学の邦文誌としての一級の発表の場として、会員一同が本誌をどう育成すべきかを念頭に投稿して頂くのが何よりと考えている。

(柿田 章)